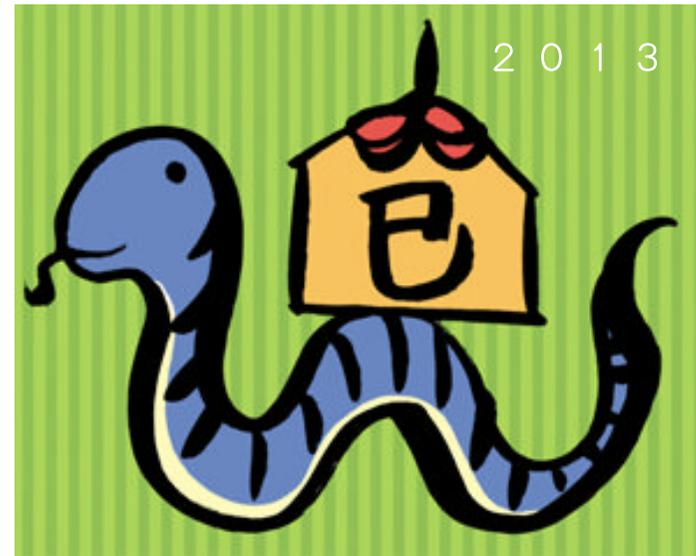


# 清 月



第151回 平成25年 2月

俳句季題(季語)について

俳句季題は、立春に始まり大寒で終わる立春暦(二十四節気)を基準にして、句の整理や句集を編集されたりします。

ゆたか

しかしこの暦だけでは混乱する季題があります。その一部を記載すると次のとおりです。時候季題の彼岸は春と秋にあります。立春に近い春の彼岸を単に「彼岸」と詠み、秋の彼岸を「秋の彼岸・後の彼岸」などと詠みます。

天文季題の名月は、仲秋の十五夜と晩秋の十二夜の月がありますが、仲秋の月は単に「名月」と詠み、晩秋の月を「後の月・栗名月・豆名月」などと詠みます。

生活季題の暖炉・火鉢・炬燵などは、仲秋ころから晩秋、しかし山岳などでは夏にも用いる地方や地域があります。これら季題は、その盛期以外は、「春暖炉・夏暖炉・秋暖炉」「春火鉢・秋火鉢」「春炬燵」などと詠みます。

行事季題の節句のうち人日・雛・端午は新暦、七夕は新暦の月遅れ、重陽は旧暦の当該日の季題として詠みます。また盂蘭盆は新暦の月遅れものを詠みます。

植物季題では薔薇のように四季を通じて詠まれるものがあります。単に薔薇と詠むとその盛期の夏の季題となります。夏以外の薔薇は「春薔薇・秋薔薇・冬薔薇」などと詠みます。

動物俳句では、越冬する蜂や蠅がいます。これらも単に「蜂」と詠めば盛期の春のもの、「蠅」と詠めば夏のものとなります。これらの盛期以外のものは「夏の蜂・秋の蠅・・・」などと詠みます。

潮騒

野田ゆたか

潮騒の絶ゆ間なき浜若布干す  
恋猫の夜すがら声の喧しく  
殉教の裔生くる世に絵踏なく  
風見鶏料峭の風ほしいまま  
涅槃図の嘆きさながら焼香す



雑詠

ゆたか選

(太字は秀逸句)

寒明けの空より雀零れ落つ 千葉清水恵山  
蹲の薄氷押せば陽の傾ぐ  
一斉に男等走り野火移る  
節分の風強き日となりにけり  
早春の陽の柔かく肩包む  
御手洗の竜の口より春の水 吹田池下よし子  
如月や京の夕餉に若狭ぐじ  
普請場のひびく槌音春兆す  
青春のあはき思ひ出雪割草  
枕辺に夫の積ん読月おぼろ

入墨のやから法度の会陽かな 岡山橋本幹夫

春めくや路上ライブの昼下り  
末黒野や末広がり阿蘇の山  
一発の弾丸余し 猟名残

凍解の泥撥ね除けてモトクロス

小さくとも健気に咲きし冬すみれ 山梨湯沢正枝

残雪や合掌づくりの軒ひくく

春光や糸尻いびつな織部焼

春たつや相合傘の肩ふれて

風花の湖渡りきて西明寺 岐阜石崎そうびん

焼芋の一つに足りて老い二人

頬被逆光の瀬へ網打てり

ごちや混ぜのアルファベットや枯蓮田 岐阜石崎そうびん

魁に続けとばかり梅咲きぬ 兵庫堤千鶴子

うす暗き風の合間にひじき刈る

雪崩くるその一瞬の修羅場かな

儂さを少しとどめて春の雪 大阪木村宏一

下萌ゆる気の溢れ来る一日かな

写すまで待てずに消ゆる淡き雪

関取の雄姿間近や鬼やらひ 静岡渡邊春生

春の水吸うて命の生るる音

春帽子被り佳きことありさうな

安らぎのランチに憩ふ春メニュー 三重山口美琴

露の臺我一番と頭出し

春霜や本詠む声のやはらかき 三重山口美琴  
老い二人節分の声控え目に 千葉筒井省司  
少年は今や七十路に梅の花  
爺婆にバレンタインの日のありて  
妙齡と同じ匂ひの梅咲きて 山梨志村万香  
春の雪なにやら嬉し心地して  
花写真刺したる苗木春を待つ 千葉田村公平  
球審の声ストライク風光る  
堰に落ち流れて春の音となり 大阪森戸しうじ  
老いの身に毛布重ねて早寝かな 愛知駒田暉風  
立春の日差し集めて茶を汲みぬ 山溪  
冬日背に絞り括りの媪かな

立春の日差し集めて茶を汲みぬ

山溪



寸感

ゆたか

寒明けの空より雀零れ落つ

恵山

目にした景を即興で詠まれた矚目即興俳句のお手本のような詠みっぷりに好感。

寒明けの喜びと雀の茶目つ気が心地よく伝わってくる佳句。

御手洗の竜の口より春の水 よし子

登竜門を連想させる竜の口からに春の水、この先に佳いことがありそう。景が明るく句ののリズムもよい佳句。作句を楽しんでる様子に好感。

入墨のやから法度の会陽かな 幹夫

会陽に真摯に取り組まれている作者の様子が伺える佳句。文語では「入墨」は「刺青」と表記されるので刺青に改め清月俳句歳時記の「会陽」の例句とさせていただきます。

小さくとも健気に咲きし冬すみれ 正枝

春には可憐に見える葎も冬のものとなると「けなげ」に見えるという作者。句材の正面から対峙し、上手にまとめられた佳句。

魁に続けとばかり梅咲きぬ 千鶴子

もう咲く頃と梅を見ていると膨らんだ蒼が数輪咲いたか思うと次々に咲いてきたという観察眼に好感。咲き継ぐ梅の間経過が心地よく伝わる佳句。

添削

ゆたか

原句 山椿石段すすめば開山堂

中七の「石段すすめば」がリズムを崩している。「段をのぼれば」とし、石段であることは読者の判断に任せます。

添削句 山椿段(磴)をのぼれば開山堂

清月俳句会のホームページ  
<https://haiku575.info/seigetukai/home/homu.htm>

平成二五年三月二〇日発行  
平成二五年三月二〇日発行  
主宰兼編集 野田ゆたか  
発行所 大阪清月庵